

香り放つフウラン

我が家のフウラン(風蘭・ラン科フウラン属)が花を開き、夕方になると甘い香りを放っています。フウランについてはこの「たより」の14号で書いていますので、その文を再録して、作文の苦勞からのがれさせてもらうことにしました。ご容赦下さい。



フウラン(風蘭)が花をつけています。(山と花の便り14号2006. 7. 4より転載)

近所のフウランが白い花を咲かせ、昼間でも甘い香りを漂わせている。

去年(05年)の夏の夜、農民連(農民組合)への加入を訴えに五條市内の大きな農家を訪問した。門をくぐったとたんいい香りに包まれ、思わず鼻をひくひくさせながら、周りを見回した。すぐに同行のSさんが「いいにおいでしょう。風蘭ですよ。私の梅畑に着いたものを株分けして、ここの木に着けてましてん」と教えて下さった。白く細い花数本が闇を突き破ったかのようにして咲いていた。

五條市南部から旧西吉野村にかけての一带は柿と梅の名産地である。初春山の斜面を白やピンクに染め、爽やかな香りで満たす梅畑は、夏の夕べにもこの甘い匂いを発するのだろうか。また、この花は夕方から匂いを強め、夜行性の蛾を花に誘って受粉すると言うが、どんな蛾がこのか細く美しい花を訪れるのだろうか。「梅畑の風蘭が咲いたら見せてほしい」とSさんに頼んでおいた。

早速Sさんに電話すると、「平地(ここでは大和盆地のこと)ではもう咲いてますか。山ではまだまだですわ。咲いたら連絡しますが、高いところに着いているの

で望遠レンズを持ってこないで写真になりまへんで」とのことだった。カメラもレンズも持ってなどいないが、見るだけでいい、吉報を待つとしよう。

以下は図鑑などからの請売りである。

風蘭はセッコク(石斛・ラン科セッコク属)などと共に日本の蘭の一種で、シンビジウムなどあでやかな美しさをもつ洋蘭と違って地味だがすっきりした美しさが特徴である。昔から日本人に愛好され、特に江戸時代には将軍家(殊に11代家斉が愛好家として有名)や諸大名、武士や豪商の間で一大ブームがつづき、多くの園芸品種や奇種、珍種が作り出され、高値で取引されたとのこと。富貴蘭の別名はここから来たというのが有力な説。今でもインターネットオークションで一株数十万円の物もあり、びっくりさせられる。

愛好家たちは寝苦しい夏の夜、このフウランの香りで慰められながら寝付いたという。夏の参勤交代などにも風蘭を持ち歩いた大名もいたとか。風鈴の音色、風蘭の香りで夏の暑さをしのぐなんて、風雅のきわみというべきか。

ちなみに日本建築の欄間の起こりは、この風蘭の香りを家内に行き渡らせるためのものだったとの説もある。

ところで、長い年月をかけて磨かれ、受け継がれ、世界に冠たる風蘭の名花、名株も明治維新の動乱と太平洋戦争の戦火で大半焼失したと言う。なんと言うことだろう。戦争はまた花や文化の最大の破壊者でもあるのだ。

ニ上山だより



岩屋のハンゲショウ(写真左・ドクダミ科ハンゲショウ属)が開花の準備をしています。花のすぐそばの葉が白粉を塗ったかのように白化しています。花を目立たせるためと考えられています。真ん中の写真はハエドクソウ(蠅毒草・ハエドクソウ科ハエドクソウ属)の花ですが、葉も写っていないし分かりにくいですね。根のしぼり汁で蠅取り紙を作ったそうです。右の写真はジャノヒゲ(蛇ノ髭・ユリ科ジャノヒゲ属)です。 以上96号